今鏡

用光と白波　口語訳

用光が、相撲の使ひに西の国へ下りけるに、吉備国のほどにて、沖つ白波立ち来て、

用光が、相撲の使いで西国(今の九州)へ下っていた時に、吉備の国(今の岡山県と広島東部)のあたりから、海賊が出てきて、

ここにて命も絶えぬべく見えければ、褐衣、冠などうるはしくして、

(用光は)ここで命もきっと絶えてしまうのだろうと思われたので、上着や冠などをきちんと美しく整えて

屋形の上に出でて居りけるに、白波の船漕ぎ寄せければ、

屋形(船の屋根)の上に出て座っていたところ、海賊の船が近寄って来たので、

その時、用光篳篥とり出だして、うらみたる声に、えならず吹きすましたりければ、

その時、用光は篳篥を取り出して、哀切な音色で、並大抵ではなく(何とも言えないほど素晴らしく)澄んだ音色で吹いたので

白波ども、おのおの悲しみの心おこりて、かづけ物どもをさへして、漕ぎ離れて去りにけりとなむ。

海賊どもは、それぞれ悲しみの心がおこって、ご褒美の品々まで渡して、漕ぎ離れて去ってしまったということだ。

さほどの理もなき武士さへ、情けかくばかり、吹き聞かせけむもありがたく、

あれほどの道理に合わない(道理もわきまえない)武士でさえ、情けをかけてしまうほど、

吹いて聞かせたということも、滅多になく、

また昔の白波は、なほかかる情けなむありける。

昔の海賊は、やはりこのような情けがあったのである。

モノマナビ研究所　このプリントは無料ダウンロードできます。https://monomanabi.co.jp